

東アジア漢字文化の過去・現在・未来

金 文 京

1 はじめに―駅の表示から

まず下の図を見ていただきたい。これは東京の山手線のある駅のプラットフォームに貼ってあったもので、近年ふえた外国人観光客をも対象とした表示になっている。まず一番上は日本語で「やめましょう、歩きスマホ」、次は英語で「STOP: Texting While Walking」で、ingで韻を踏んでいる。

そして下段の左側には漢字の繁体字（正字体）で、「専（專）心走好路、別當（当）

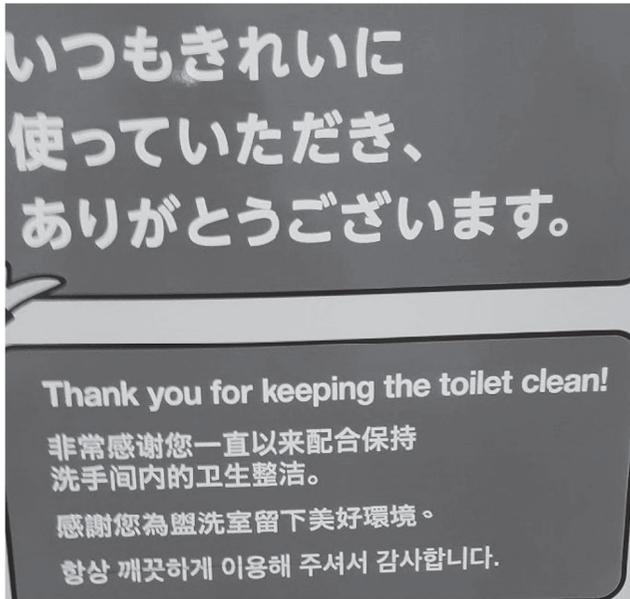


低頭族」とある。○内は筆者が日本の常用字に改めたもの、以下も同じ。「注意を集中してちゃんと歩き、下向き族になるな」という意味で、「路」(lù)と「族」(zú)が中国語では一応韻を踏んだ形になっている。これは主に繁体字を使用している台湾、香港からの観光客のためのものである。ちなみに中国語の「走」は走るではなく歩くという意味である。また注意深い読者の方は、プラットフォームは路ではないのに、なぜ「走路」と言うのだと疑問をもつかもされないが、中国語ではこういう場合の「路」には意味がない。たとえば「子供がもう歩けるようになった」は、中国語で「孩子学会走路了」と言う。これはむしろん、孩子（子供）が道路を歩けるようになったという意味ではない。

さてその右は中国大陸で使われている簡体字で、「不要在走路时（時）、使用手机（機）」（歩く時にスマホを使用するな）とある、これはむしろん大陸からの観光客用である。台湾、香港と大陸では字体が違っただけでなく文章も異なる。中国語の文体は多彩なので、台湾、香港と大陸では、語彙や言い方にも若干違いがあるが、ここではその問題には触れないことにする。

最後は韓国語で「걸어가면서 스마트폰 사용하지면 위험」(歩きながらスマートフォン使用すれば危険)である。「스마트폰」(スマートフォン)はスマートフォンで写している。「사용」(サヨン)、「위험」(ウイホム)は、韓国語はバ行で写している。「사용」(サヨン)、「위험」(ウイホム)は、それぞれ「使用」「危険」の韓国語の漢字音(いわゆる朝鮮漢字音)である。韓国は今では漢字をほとんど使わないので、漢字語もハングで表記する。

もう一例、コンビニのトイレの標語をあげてみよう。



「いつもきれいに使っていただき、ありがとうございます」という日本語に対して、まず英語は「Thank you for keeping the toilet clean!」次が簡体字で、「非常感謝(謝)您一直以来配合保持洗手间(間)內的卫(衛)生整洁(潔)」(いつもトイレ内の衛生、整頓清潔保持に協力してください、あなたに感謝します)、ついで繁体字、「感謝您為盥洗室留下美好環境」(トイレのために良好な環境をとどめてください、あなたに感謝します)、最後は韓国語「항상 깨끗하게 이용해 주셔서 감사합니다」(いつもきれいに利用してください、感謝します)。

簡体字は22字、繁体字は13字で、簡体字の方が9文字も多く、かつ共通するのは「感謝(謝)」と「您」(あなた)だけである。特にトイレは、簡体字が「洗手间(間)」(お手洗い)、繁体字では「盥洗室」(「盥」は洗う、または手を洗う盤、タライのこと)になっている。これはおそらく中国大陆、台湾か香港の人に頼んで書いてもらったのであろう。個人差もあるので、大陸と台湾、香港の表現の違いを代表するものは必ずしも言えないが、表現が相当異なっていることだけはわかるであろう。韓国語の「항상」(ハンサン)、「이용」(イヨン)、「감사」(カムサ)は、それぞれ「恒常」「利用」「感謝」の韓国語漢字音で、「恒常」は「いつも」の意味、韓国語の表現がもとの日本語にもっとも近い。これは日本語と韓国語の語法が似ているからである。英語、中国語では、日本語、韓国語では不要な「you」「您」が必要で、その代り「いただき」に当たる表現がない。韓国語では「주셔서」(ジュシヨソ)が「いただき」に相当する。日韓ともに敬語、謙讓語表現が発達しているからである。



このような中国語二種と韓国語の表示は、近年コンビニなど至るところで見ることができると、もう当たり前のようになってしまった。しかしこういう表示をしているのは、世界広しといえども、実は日本だけである。韓国でも日本語と中国語の表記は見られるが、ただし中国語表記は簡体字か繁体字かのどちらかだけである。簡体字はむしろ中国大陆観光客用だが、繁体字は別に香港、台湾人のためではなく、韓国の漢字も繁体字なので、自用使用の漢字で書いているところが、香港、台湾人のために繁体字を使う日本とは異なる。中国大陆では商店の看板など最近繁体字使用が増えたが、この種の公共の表示は簡体字だけ、台湾は繁体字だけである。これは特に政治的理由などがあるわけではなく、ほとんどの人は両方とも読めるので必要ないからである。欧米などそれ以外の地域では、全部調べたわけではむろんないが、こういう表示、特に中国語の二種併記はないと思える。

ではなぜ日本だけ中国語を繁簡二種の字体で、しかも文章まで変えて表示しているのだろうか。常識的に考えれば、中国大陆と香港、台湾を区別しているからであろう。北京政府の一国兩制は、香港、台湾での繁体字使用を今のところまだ認めているので問題はないが、しかし次の例はどうだろう。

これは京都は木屋町四条小橋の喫煙所で、大陸用に「吸煙禁止」、台湾用に「抽菸禁止」（「菸」は煙草のこと）、さらに英語など十一カ国語で同じことを書いたものだが、最後に「路上喫煙禁止を十三か国語で表示しています」とある。これは中国と台湾を明らかに別の国として勘定しているので、大いに問題である。中国から抗議されてもおかしくない。

ただし、これを書いた人、たぶん京都市の役人は、おそらく台湾は中国とは別の国であると主張したかったわけではないだろう。単に気がついていないだけだと思う。日本では絶対にお目にかからない「菸」を使う念の入れようで、細部にこだわりながら、より重要な問題には無頓着なところが、いかにもお役人の仕事らしい。「十三か国」はあきらかに蛇足である。ついでに言えば、「吸煙（抽菸）禁止」は日本語の語順なので、中国語としては「禁止吸煙」の方がよいだろう。

## 2 異体字へのこだわり

政治的主張ではないとすると、では理由は何であろうか。思うにそれは日本人の自慢とするおもてなしの精神であろう。来ていただいた

お客さんの立場によりそって、不便がないよう気遣いをする、だから相手の国（地域）の文字で書いたのだろう。しかしそれが無用であることは、すでに述べたとおりである。

その他、もう一つ日本側の理由として、日本人は異体字にこだわるということが考えられる。特に人名について、齋藤と斎藤、渡辺と渡邊、渡邊、船田と船田など、間違えると相手に失礼になることは、日本での常識である。しかし「齋」と「斎」、「辺」と「邊」、「船」と「舩」は、同じ字の本字、略字、異体字の関係にあり、意味が違うわけではない。齋藤と斎藤、渡辺と渡部、船田と舟田のように、同じ発音であっても別字を使った場合とは同じではない。これはたとえばハンコは篆書体を使う、あるいは英語で同じ名前の場合によってはゴシック体、イタリック体で書くのと同じことで、用途やケースによって使いわけるだけで、本質的には同じ字である。

台湾の陳先生が大陸に行けば簡体字で陳先生と書かれ、大陸の馬女士は台湾では馬女士になるが、そんなことにこだわる人はまずいない。あるいは韓国にも曹という姓があるが、伝統的に曹という異体字で書かれることが多い。かといって曹さんを曹さんと書いても特に失礼にはならないし、曹と曹の二つの姓があるわけではない。昔は正式、公式の文書、目上への手紙などは本字（繁体字）、私的、非公式の文書、親しい人への手紙などは略字、異体字、俗字を使ってもよいという基準で、大陸の簡体字は、基本的には非公式の略字を公式の文字としたに過ぎない。また台湾、香港では繁体字が正式の文字とはいえず、メモやノートでまで繁体字で書いているわけではなく、略字も使われ

ている。また「盥洗室」「抽菸」などは文章語で、口語では台湾でも「洗手间」、「吸煙」または「抽煙」と言う。

字体あるいは筆順へのこだわりは、日本独特のものである。これにおもてなしの精神、さらに律儀さが加わって、全国津々浦々の観光地からコンビニのトイレ、はては銭湯にまで、中国語二種併記が行われているわけである。二種併記であれば、中国大陸、台湾、香港からの観光客は、それを見て、日本は自分たちのことを考えてくれていると、そのサービス精神に感心、感謝するかもしれないので、まったく無駄というわけではないが、必要性という観点から言えば、二種併記しなくともかまわないのである。そのために税金、費用を使うかどうかも考慮の余地があるだろう。東アジア全体の中で漢字がどう使われているかを知ることが、単なる知識の問題ではなく、お金もからむ現実的な問題であることが、ご理解いただけたであろうか。

### 3 次は車内放送―固有名詞の読み方

中国人、韓国人観光客へのサービスは、駅の案内表示だけではない。たとえば車内放送である。電車が関西空港に近づくと、「次は関西空港です」「Next station is Kansai Airport」につづき、中国語の「下一站是关西 (guānxī) 机场 (機場)」ついで韓国語「다음역은 간사이 (kansai) 공항입니다」という声が流れる。この場合は音声であるから、字体はむろん関係ない。中国語の「下一站」は次の駅、「关」は「関」の簡体字（繁体字は「關」）、机场（機場）は飛行場である。韓国語の「하」(yok)、「포항」(konghang) は、それぞれ「駅」と「空港」の

韓国語漢字音である。

それはいいとして、問題は「関西」の発音である。中国語放送では中国語で読んで *guanxi* と言っている。しかし韓国語は *kansai* と日本語読みで、英語と同じである。韓国語漢字音では関西は「관서」(*guanseo*) になるが、そうは言っていない。これはなぜであろうか。

漢字の字体はいろいろあるが、基本的に東アジア漢字文化圏では共通である。これに対して漢字の発音は、中国標準音（さらに各地の方言音もある）、ベトナム漢字音、朝鮮漢字音、日本漢字音（いわゆる呉音、漢音、唐音）とばらばらで、もとはすべて中国古代の発音に由来するが、長い間にそれぞれの国、地方で独自の変化を遂げ、もとは同じなので、なんとなく似ている場合もあるが、全体としては耳で聞いただけではわからないほどの相違ができてしまった。したがって同じ漢字をそれぞれの国、地方の発音で読むのが通例となり、目で字を見ればわかるが、耳で聞いても何を言っているのか、読んでいるのかわからないことになる。日本にはこの他、漢字を日本語の意味で読む訓読みもあり（山―「やま」など）、これは日本語を習ったことのない外国人にはまったくわからない。

人名、地名などの固有名詞も同じで、たとえば「中国」は、現代中国語では *Zhongguó*、韓国語では「중국」(*Jungguk*)、日本語は「ちゅうごく」(*Chugoku*)、ベトナム語では *TrungQuoc* と、なんとなく似てはいるが相当異なる。また人名は私の名前、金文京を例にとると、韓国語では *김문경* (*KimMunkyeong*)、中国語では *Jin Wenjing*、日本漢字音では「きんぶんきょう」(この他、漢音、呉音の組み合わせで「き

んぶんけい」、「きんもんきょう」なども読める)、ベトナム語では *Kim Vankinh* となる。このように漢字文化圏では、同じ漢字をそれぞれ別の発音で読むのが昔からの習慣であり、相互に暗黙の了解があり、それで特に問題はなかったのである。ただし地名については、朝鮮通信使などが、たとえば博多を「朴加大」(*Pakkatat*) と音を任意の漢字で当てた例があった(宋希璟『老松堂日本行録』)。これは日本がまだ漢字を使用する前に、邪馬台国、卑弥呼と、中国人が勝手に音を漢字で当てたのと同じことで、漢字が使われるようになってからは少数の例外である。

#### 4 韓国の主張

ところが20世紀後半ごろから、これに異を称える意見が韓国から出て来た。たとえば私の名前は *KimMunkyeong* である。それを勝手に *KimBunkyo*、*JinWenjing* などと読み替えるのは固有名詞の独自性を無視するものであり、人権侵害にもなるというのである。そこで韓国は、ひと昔前までは日本人の名前や地名、たとえば豊臣秀吉を韓国語漢字音で *풍신수길* (*PungsinSugil*)、日本でも音読みすれば「ほうしんしゅうきち」とやや近い発音になる)、東京を *동경* (*Donggyong*) と呼んでいたのを改め、日本語の発音をハングルで *토요토미히데요시* (とよとみひでよし)、*토요* (とよよ、韓国語には長母音がないので「う」が抜けている) と書くようになった。ソウルから仁川空港に行く空港鉄道にも英語のほか日本語、中国語の車内放送があるが、仁川は韓国語で *인천* である。日本でも昔は「じんせん」と日本語読みして

いたが、今ではインチョン空港がすっかり定着した。

中国の人名、地名についても同じである。それだけでなく、同じことを日本や中国にも要求した。つまり韓国の地名、人名を日本漢字音、中国漢字音ではなく、韓国のもとの発音で表記しろという要求である。ベトナムにも要求したかどうかはわからない。

## 5 日本の対応

この韓国の主張は、一見まことにもつともである。固有名詞は何よりも発音が重要であることは言うまでもない。そこで日本では韓国のこの主張に賛成する人が多く出た。あるいはこれは、幸子さんが自分にはユキユでサチュではないと言っているのと同じことだと思っただ人もいるだろう。漢字の問題、あるいは民族、人権問題に関心がある人ほど、韓国の主張には共感を覚えたようである。

そこで日本の新聞などでは、韓国また北朝鮮の人名、地名を日本漢字音で読んでいた従来の慣習を改め（北朝鮮は特に要求していないが）、現在ではたとえば尹錫悦（日本漢字音なら「インセキエツ」）大統領、金正恩（日本漢字音なら「キンセイオン」）委員長、釜山（「フザン」）、平壤（「ヘイジョウ」）のように、韓国語（朝鮮語）の発音をルビで振り、テレビ、ラジオ放送でもそのように発音していることは、周知のとおりである。と同時に当然ながら、韓国語放送での日本の固有名詞は日本語読みとなった。車内放送で「関西空港」の「関西」が「Kansai」と日本語の発音であるのはそういうわけである。

それだけでなく中国語の固有名詞にもこれを適用しようという動き

も一部に現れ、以前はたとえば「ろじん」と読んでいた「魯迅」に「魯迅」、「西安」を「せいあん」ではなく「西安」と中国語の発音で読む例も、最近では多く見かけるようになった。ただし習近平主席は依然として「シェウキンペイ」と日本語読みで、韓国語ほどは徹底していない。中国は韓国と違って、自国の固有名詞を中国語で表記しろという要求していないことが一因であろう。結果的に日本は中国と韓国で、異なる原則によって対応していることになる。

なお地名については、北京、南京、上海、広東、香港など、中国の南方方言で読む例が以前からあるが、これは江戸時代に長崎を通じて入った唐音、もしくは明治以降、西洋人の呼び方にならったものである。

## 6 固有名詞現地音主義の問題点

韓国のこの主張を、とりあえず固有名詞現地音主義とよんでおくことにしよう。この主張はいかにもつともだが、問題点もある。

まず最初の問題は中国の対応である。日本は固有名詞現地音主義に対し片仮名表記で対応している。Kim がキム (Kimu) になるなど若干違うところもあるが、これは英語のカタカナ表記も同じことなので、まずは問題ない。韓国はハングルで表記するので、だいたい日本の仮名と同じで、やはり問題はない。問題は中国の対応である。中国の自国語表記は漢字だけであるから、外国の固有名詞も当然、漢字で表記する。しかしたとえば現代中国語の標準音（いわゆる普通話）には、**ㄷ** という発音がない、昔はあったのだが、口蓋化という現象によって、

ある時期からㄷはすべてㅈになってしまった。そこでたとえバウクライナのキエフは「基輔」(Kyiv)と表記する(念のために言っておくと、だからといって中国人はㄷが発音できないというわけではない)。知らない人にとって「ジーフ」からキエフを想像することはまず不可能であろう。またmで終わる音節もないので、Kimを漢字で正確に表記することはできないのである。どうしてもということなら「基母」(jimu)とでも書くしかない。日本のキムは当たらずといえども遠からずだが、ジムは許容範囲外だろう。つまり中国はたとえ固有名詞現地音主義をやろうとしたとしても、できないのである。

一方、外国の固有名詞をすべて漢字で表記するというのは、歴史的に中国がずっと採って来た方法である。たとえば「倫敦」(ロンドン)、「巴里」(パリ)などは日本でも使われている。中国の原則は、漢字文化圏以外の欧米などの固有名詞は、現地の発音を適当な漢字で表記する(「基輔」のように、しばしばあまり適当ではないが)、そして漢字文化圏(日本、朝鮮半島、ベトナム)については、現地の漢字表記を中国語で発音するということであった。

韓国の主張する固有名詞現地音主義は、言い方を変えると、漢字文化圏についても非漢字文化圏と同じ扱いにせよということ、つまりは漢字文化圏からの離脱あるいは解消を目指すもので、一種のグローバル化であるといえる。これは言ってみれば、漢字が東アジアで広く使われるようになる前の状態、日本なら邪馬台国の時代に逆もどりとすることになる。ただし中国は現在の方法を変える気は、今のところまったくないので、韓国の主張は中国では、少なくともも当分の間、実現する見込みがない。

次に、漢字文化圏のこれまでの慣習、默契を破棄して、邪馬台国の昔にもどるのは、実際には簡単なことではない。なぜなら日本、朝鮮半島、ベトナム、すべて漢字を受け入れてからすでに千年以上の歴史があり、漢字文化は自国文化の不可分の一部になっているからである。これを破棄することは、下手をするとタライの水といっしょに赤子まで流してしまうことになりかねない。

たとえば孔子、李白など中国史上の多くの人物は、日本、朝鮮半島、ベトナムでも自国の歴史上の人物と同じく、あるいはそれ以上に親しまれている。さすがの韓国も孔子や李白を中国語で Kōngzǐ、Lǐ Bái とよぼうとは言うておらず、従来どおり 공자 (Kongja) 〇 백 (YiBaek) と韓国音でよんでいる。そうでないと大変な混乱が起ってしまうからである。日本でもし「孔子はこう言った」、「李白の詩」を「コンズはこう言った」「リバイの詩」と言わねばならないとしたら、どうなるだろう。まず実現不可能であることは説明を要さないであろう。となると範囲を限定して、どこかで線引きをしなければならないだろう。たとえば歴上の人物は仕方がないので従来どおりにして、現代の人物だけは現地音にしようということで、20世紀以降に生れた人にかぎって現地音で表記すると決めたとしよう。そうするとたとえば、

毛沢東 (1893-1976) は「もうたくとう」「鄧小平 (1904-1997) は「トシチャオピン」と書くことになる。これはいかにも変であろう。どのような線引きをしたとしても、この種の問題が生じることは到底免れない。

であれば、従来どおりでよいのではないか、という意見もあるだろう。現在、少なくとも漢字を常用している中国（香港、台湾）と日本の間では、字形などさまざまな相違はあるが、相互に自国の漢字音で相手の固有名詞を読むという従来の方式は、特に大きな問題なく行われている。しかしそこにも変化の波は確実に訪れつつある。

## 7 欧米の場合との比較

ではこのような問題は漢字文化圏に特有なものなのであろうか。いや決してそんなことはない。大多数の国がアルファベットを使う欧米でも似たような問題はある。たとえばフランスの首都 Paris パリを、イギリス、アメリカ人は英語風に最後の s も読んで Paris と発音する。イギリスの London ロンドンをフランスでは Londres と表記する。ドイツの作曲家 Bach を英米人はバークと読む、同じような例は枚挙に暇がない。これは同じアルファベットを使いながら、その読み方や表記法が各国語によってやや異なることから生じる問題であろう。

しかしこれらの問題をめぐって、フランス人が英米人に Paris でなくパリと言えとか、英米人がフランス人に Londres と書くな、ドイツ人がバークじゃなくてバッハだぞと文句をつけたという話は聞いたことがない。それは歴史的に長い交流の中で、相互の相違点を理解し、それを認め合っているから、つまりこの問題について長い間に培われた慣習と默契が存在するからにほかならない。この点は東アジア漢字文化圏と同じであろう。

一般に同じ文字、同じ文化を共有し、歴史的に密接な交流のある国、

地域同士では、さまざまな経緯により、固有名詞の読み方、書き方に相違が生じがちである。ドイツのことを英語では Germany、フランスでは Allemagne という例さえあり、それなりの歴史的経緯があってそうなっているわけである。一方、歴史的に交流があまりなかった国同士では、お互いに現地音で表記することになる。たとえば日本人がパリを英語風の Paris と言ったり、ロンドンをフランスにならってロンドンと書いたりする理由は何もないであろう。同じく欧米人が田中さんを Tanaka 以外の発音で読む必要も理由もない。

欧米と東アジアとの相違は、欧米が歴史的慣習や默契をそれなりに今も維持しているのに対し、漢字文化圏では近代になってベトナム、北朝鮮が漢字を廃止し、ベトナムは国語という名のアルファベット、北朝鮮はハングル（北朝鮮では「조선문자」朝鮮文字という）のみを使い、韓国は廃止こそしていないが、ほぼハングル専用で、漢字を常用するのは中国（香港、台湾）と日本だけになってしまい、文化圏としてはすでに成立しなくなっていること、またこれらの地域は、すべて19世紀以来、西洋近代化の強い影響を受け、国家制度や社会が大きな変化を遂げ、近代以前の歴史的慣習や默契の多くが忘れ去られてしまった点にある。

ではどうすればよいのか。再び過去の慣習、默契を取りもどすのか、それとも過去は捨てて新しい方式に転換するのか、私たちは今その分岐点にいると言えるであろう。

## 8 むすびに代えてーグローバリズムと民族主義

数年前、中央アジアのグルジアが、国名をジョージア (Georgia) に変更した。グルジアはロシア語の読み方で、本当はサカルトヴェロ (sakartvelo) というらしいが、とにかく英語読みに変えたわけである。また今年の6月、トルコは国連での国家名称表記を、現行の英語風のターキー Turkey から、トルコ語の Türkiye トウルキエに変更するよう申請したとの報道があった。ウクライナ紛争によって、キエフがキエウに、オデッサがオデーサになったことは記憶に新しい。

世界には、ヨーロッパキリスト教文化圏、中東のイスラム文化圏など歴史的に同じ文化を共有し、地理的にも近接したいくつかの文化圏がある。東アジアの漢字文化圏もむろんその一つである。そしてこれら古くから存在する文化圏は、現在みな外からはグローバリズム、言語的には英語化、内からは民族主義の荒波にさらされている。ジョージアは英語化、トウルキエは民族主義の台頭、そしてキエフとキエウは異なる民族主義のせめぎあいの中で起こった変化であろう。

漢字文化圏の固有名詞現地音主義もまたこの二つの動きと無縁ではない。漢字文化圏の枠をはずして、その他の世界と同じような扱いにというグローバリズムと、韓国の人名、地名は韓国語でという民族主義が合体したところに、この主張が出てきたからである。それが漢字を廃止はしていないが、しかしほとんど使っていない韓国によってなされたことは、見ようによっては必然性があるかもしれない。

東アジアの固有名詞の読み方、呼び方が将来どうなるのかは、今の

段階では誰にもわからない。しかもとにもどることは、多分もうないであろう。あるいはグローバリズムという名の英語化が進み(日中韓のビジネスではすでに英語が共通語になっている)、いずれ「今日はチャイナ料理、明日はコリア料理」となるかもしれない。若者の中には、すでにそういう言い方をする人もいるらしい。あるいは『三国志』を語るのに、「劉備(りゅうび)と孔明(こうめい)」ではなく、「リウバイとコンミン」と言わねばならない時代が来るかもしれない。欧米でもみんながパリ、ロンドンとなるかもしれないのである。

言語の変化は、決してある原理原則によって合理的に進むものではない。場合によっては偶然が大きな力となって、少なくとも同時代の人々には見通すことのできない思わぬ方向に変化してしまうこともある。したがってここでは、この問題について、どうあえるべきかどうかということを提言するつもりはない。

この問題についての目下の状況は、韓国が固有名詞現地音主義ではばまとまっているのに対し、漢字使用国である中国、日本での関心はきわめて低い。日本での漢字への関心は、ほぼ日本国内に閉ざされている。そのような中、インバウンドのおかげで中国語二種併記、韓国語表記が至るところで見られるようになったことは、この問題を考えるうえでひとつの契機となりうるであろう。どうするのか、どうあるべきかを性急に論じるのではなく、今どうなっているのか、過去にはどうだったのかを多くの人が正しく理解することは、言語の変化がたとえ恣意的なものであるとしても、将来の問題を考えるうえでやはり重要であろう。筆者がこの小文にこめたささやかな願いもそこにあ

東アジア漢字文化の過去・現在・未来

る。観光地やコンビニ、銭湯で上記のような標語を目にしたら、これはどうということなのか、考えていただければ幸いです。

(京都大学名誉教授)